

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	愛川町立愛川東中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	愛川町の外国に繋がりのある子ども達の笑顔輝く未来のために

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至るまでの経緯

愛川町は、神奈川県下の中で一番外国に繋がりのある子ども達が多い。今後さらに外国からの労働者が増えることが予想され、その家族である子ども達も増えるであろう。外国に繋がりのある子ども達の問題や本人を取り巻く環境の問題等、多岐にわたって丁寧な対応が必要だが、現場にはそれらの問題に対応する人的配置等が全く足りない。問題は山積している。

2. 活動・研究のねらい

外国に繋がりのある子ども達や保護者に関しての問題が山積している中、全国にはほとんど位置づけられていない国際教育コーディネーターを配置し、一つ一つの問題に対して丁寧に解決していきたい。国際教育コーディネーターの実績を全国に発信し、全国的に国際教育コーディネーターの必要性を訴えていく。全国で外国に繋がりのある子ども達が増えている中で、困っている子ども達や保護者、そして対応に苦慮している教職員を助きたい。外国に繋がりのある子ども達の笑顔輝く未来を明るいものにしたい。

3. 活動内容

(ア) インクルーシブ教育・多文化共生教育の推進

本校は、「誰一人も置き去りにしない授業」「インクルーシブ教育・多文化共生」を目指し、年3回の授業研究を行っている。「インクルーシブ教育・多文化共生教育」の専門の大学の先生を講師に招き、全職員が共通理解をしながら、研究を進めていった。また、8月23日の夏季休業中に愛川東中学校区（3小・中学校）で全教職員が一堂に集まり、小中一貫教育講演を行った。学区の3校の全職員が同じ歩調でインクルーシブ教育・多文化共生教育の大切さを学ぶことができたのは大変意義深かった。

(イ) 国際教育に精通しているSCの配置

外国に繋がりのある子ども達のアセスメントが大変難しい。本人の言葉の問題なのか、経験値の問題なのか、発達の問題なのか、本人を取り巻く環境の問題なのかが教職員だけではわからない。予算で心理職専門のSCが本人を観察・面接等を行い、本人の学校での困り感が何なのか、どんな支援が必要なのかのアセスメントを教職員や保護者に伝えることができた。

(ウ) 国際教育コーディネーター・多文化共生コーディネーターの配置

国際教育コーディネーターの校務分掌の位置づけが全国的にはほとんどない。本校が先進校として、国際教育コーディネーターを配置しその役割を担い、実践していった。国際教育コーディネーターの役割を学区の小学校と連携し、全職員に対してプレゼンを行った。国際教育コーディネーターの意義を学区の小中学校教員に浸透させることができた。国際教育コーディネーターの仕事が多岐にわたり多忙のため、多文化共生

コーディネーターの後補充職員の配置を県に強く要望した。義務教育段階で、外国に繋がりのある子ども達や保護者に丁寧に対応することが急務である。この配置により実績を上げ、全国に発信したい。

(エ) 県立愛川高校との連携

県立愛川高校には在県枠があり、本校からも数名の生徒が入学している。今年度は愛川高校と連携し、外国に繋がりのある高校生が本校に来て、本校の子ども達に授業を行う計画ができた。次年度から実行に移していきたい。

(オ) 日本初フィリピン日系人学校の中学生とのオンライン授業

ここ1～2年間で、本校に転入してきたフィリピンの子供も達が増えている。

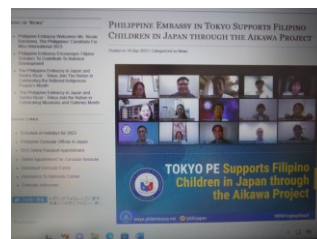
「日本にいるフィリピンの子供も達を笑顔にしたい、輝かせたい」という学校の要望を JICA 横浜が聞き、JICA 横浜を通じて、フィリピン大使館が現地フィリピンの日系人学校に話をし、日本の学校とのオンライン授業ができる環境を整えることができた。4月から7月までにオンライン授業に向けてのオンライン会議を開催し、ついに9月に日本初のフィリピン日系人学校との第一回目のオンライン授業ができた。その後、両校で丁寧な振り返りを行いながら、3月までフィリピン日系人学校とのオンライン授業を成功させることができた。2月にはフィリピン大使館の領事をお迎えし、領事が学校を見学、国際教室での授業を行い、フィリピン日系人学校とのオンライン授業を見学し、授業後はフィリピンから日本に来てまだ1年足らずの生徒にインタビューをするなど、大変温かい雰囲気の中で交流を深めることができた。神奈川新聞や株式会社タウン（オンライン授業の様子 購入したテレビが大活躍）ニュースにも数多く取材を受けた。今後もフィリピン日系人学校とのオンライン授業は継続していきたい。



(神奈川新聞に掲載)



(オンライン授業の様子 購入したテレビが大活躍)



(フィリピン大使館のホームページにも紹介)



4. 子ども達への効果（成果と課題）

外国につながるある子ども達は、日本に来て不安を抱えていると思われるが、全職員によるバックアップ体制により、生き生きと学校生活を送っている。フィリピン日系人学校のオンライン授業に参加した生徒の感想では、

「オンライン授業を受けて、とても楽しく、また新しい友達ができた」、「オンライン授業はよかったし、楽しむことができた」、「オンライン授業は日本の勉強によるストレスを軽減できているからよかった」等、プラスの意見が多かった。また、「授業を受けての良かった点は？」の質問には、「私は理科の『力』についての話題の授業が好きだった。この話題は懐かしく、フィリピンで授業をしたことを思い出した」、「私は、力の公式を忘れてしまったので、（笑顔がいっぱいの国際教室の生徒）授業は少し難しかった、フィリピンの学校の先生は、私をいつも優しく助けてくれるので、感謝している」、「コミュニケーションが取れるのが好き」等、たくさんの良かった点が挙げられた。

また、本校の地道な取り組みで一番うれしかったのが、ある一人の少年の成長である。彼は11歳でフィリピンから神戸に来日し、2年ダウングレードと診断されたため、小学3年生に編入学したが、小学校6年次には、完全不登校になってしまった。その後中1の終わりに本校に転入してきたときは、他の生徒と会うことを拒んでいたが、国際担当や日本語指導協力者を中心に、全職員の理解のもと、スモールステップで月1回の登校から、週1回、週2～3回と本人の希望に合わせて、登校回数を増やした結果、笑顔で登校できている。課題としては、外国から日本語が話せない転入生が続々と増えており、ポケトークが手放せない状況にあるが、今後も外国につながるある子ども達の笑顔輝く未来のために邁進していきたい。